

ハチクマのお客さんになって

2010.8.24



ブレインスキー保護区のオフィスの入り口に手に鳥を抱えた人が現われました。話によると彼はコルチャピン駅の近くの道のろばたで拾ったとのこと。彼は科学部門の事務所に鳥を置いて行きました。仕事に来てこの神の創造物を見、好奇心いっぱいの同僚の人ごみに囲まれながら、私はこの愛らしい生き物にどれほどの時間と労力を費やすことになろうかと予想して重く深くため息をつきました。残念なことに、人々は動物園と自然保護区の違いを知らず、いつもさまざまな不幸な動物たちを我々のところに運んでくるのが現実です – 自然保護区にはまったく違った課題や目的があることを理解せずにです。自然保護区の予算には動物を扶養する費目はなく、獣医の定員はなく、動物を屋内飼育する条件も整っていません。そしてこのような受難者は皆、哀れみから科学部門の職員によって家まで運び込まれ、動物病院に運び、アパー

トの部屋が彼らが暮らせるように整え、自腹を切って餌を与えるのです。そのため、もし病気の、あるいは弱っている動物をみつけたら自分の力を押し量ってみてください、続けて飼育して治療していただだけませんか(自然保護区の科学部門の職員は、言うまでもなく、規則に則り飼養と給餌の助言をいたします)、あるいは専門の飼育場か動物園に運んでいただませんかでしょうかと、皆様に今一度お願いしたく思っています。特に鳥には注意していただきたいです。若鳥は夏の後半、頻繁に我々のところに持ち込まれます。というのも大部分の場合、人々はつまり鳥に「熊のサービス」(ありがた迷惑)をしているのです。鳥の生態というものは、巣を離れた若い鳥はまだよく飛べず、親に餌を与えてもらうものです。慈悲深い人は、これを見て雛が巣からころげ落ちたと考え、善意から家へと連れてゆくのです。連れて帰っても不適切な世話で死んでしまったり、私たちの自然保護区に持ち込まれても、そのために科学部門の職員の生活が困難になり、動物には、はなはだ霧につつまれた未来を運命づけるのです。



最初のこってりした食事...

以上述べたことは、私たちの新しい養い子 – 若いハチクマとわかったのですが – の運命についてのお話の前置きです。この鳥は無思慮に親から取り上げられた巣立ち若鳥だったか、あるいは独り立ちした若鳥だったかは永遠に謎のままです。鋭い、張り出た竜骨はこの鳥がひどく衰弱していることを物語っています。ハチクマは平和好きと平静さで驚かせてくれました。私がインターネットでハチクマを飼養する情報を探しまわっている間、彼と一緒に写真を撮ってもらいたいと思っている自然保護区の職員の皆の手をいたりきたりしていました。甚だ曖昧な知識で武装して(ハチクマの飼養についての情報は大変乏しいことがわかりました)、私はこの子を箱に入れて家へ乗せて運びました。ハチク

マにはこんなふうになりました: 私たちは広い3部屋の職員アパートに住んでいます。2部屋は私と夫が占めていますが、3つめは新来の科学遠征隊のために使っています。そこで科学者たちが持ち物を広げ、その日に自然保護区に出発しなければ留まって夜を過ごすのです。少数の古い家具を集めてあり、移動した後で当座使わないものの入った箱が整理されていない、この広い部屋がハチクマのものになりました。横にひっくり返ったいすにモップを結びつけ、この単純な構造物を鳥に止まり場として提供しました。ハチクマはこの即席の枝にすぐにはい上がりました。

鳥の餌のことを考えなければなりませんでした。インターネットからオートミールとゆで卵、おろしたにんじん、生の脂肪のない肉とはちみつからなる混合物を餌に与えるとよいと知りしました。

これらのうち家にあったのは冷蔵庫にあった冷凍鶏肉とにんじんだけでした。はちみつについてはオリガ・クルバ(自然保護区の環境教育課講師)が助けてくれました。手始めにはちみつにちょっと浸した肉の一片を直接にこの子に提供してみることにしました。ハチクマの嘴の前で肉片を数回振ると彼はそれをすぐにつかまえて飲み込みました。私は大喜びでした。強制給餌の必要性がなくなり、鳥の身体状態が比較的正常であることがわかったからでした。このようにして何片かの肉を鳥に与えた後、鳥をしばらくそっとしておいてキッチンへ混合物を準備しに行きました。オートミールはなかったのを米で代用しました。実は当時、米、卵、にんじん、煮た肉、ビタミンとミネラル補助物の混合物を家族の一員として家に一緒に住んでいたシノリガモに3年間与えていました(この驚くべき生き物についてのお話は「文献ノート」¹のセクションで知ることができます)。用意した混合物を皿に入れ、ハチクマの嘴に近づけました。すると注意深く提案物を眺めてついでに試み始めました。私が皿を床に置くと彼はすぐに飛び降りてむさぼるように餌を飲み込み始めました。私は嬉しくなり、また仕事もあって電話をかけて、鳥はめざましい食欲だと伝えました。しかし、後で明らかになりましたようにこれは早計でした。餌が多かったか、米が影響したのか、いずれにせよ食べた分がそ嚢をいっぱいにし、固まってしまってそれ以上進まなくなっていました。私は夕方中ずっと、鳥がそ嚢から小さな塊をさらに胃の方に送り込もうと試みて、首で独特の動作をするのを観察していました。横になって眠り、夜が明け状態が改善していなければ鳥を獣医に連れていかざるを得ないと決心しました。

2010.8.25

目覚めてまず第一にハチクマのところへ行くと、彼は哀れな様子でとまり、突き出たそ嚢は夜の間に何一つ変わらなかったことを示していました。鳥は差し出した肉片を拒絶しました。仕事で電話をして所長に私は留まってこの哀れな鳥を動物病院に連れてゆくことを予め伝えました。許可を得られましたので医者に行く支度を始めました。幸運だったことに動物病院は家から近くにあり、その日は開業していて医者が現われて、十分早い時間で最初の訪問者でした。病院の獣医はビクトル・シャリコビッチ・ドウミキャンで、かくも変わった患者に対して無料で手助けをいただけただことに再度のお礼を表明したいです。ハチクマを診察して、医者はまずは手術しないでこの塊を砕くことを試みようと言いました。このため、医者は植物油の塊を何度か鳥のそ嚢にゾンデで直接に入れましたが、鳥は無力感からか、あるいは悪意のない性格由来の力からか、全てを我慢強く耐え、ひっかき散らすことも嘔むこともありませんでした。油を入れて、医者はそ嚢にマッサージを施し、私にそ嚢のマッサージを頻繁に行うよう伝授しました。そしてもし夕方までに餌が出て行かなければ、改めて16時まで準備したせんじ薬を与えるよう指示しました。

ハチクマを家へ連れて帰り、彼のそ嚢を予めマッサージして仕事に急ぎました。仕事には2時間いましたが、所長に事情を説明して家に帰る許可を得ました。道で薬局に駆け込み、せんじ薬を買いました。そ嚢はまだ大きさが小さくなっていませんでしたが、触ってみて柔らかくなっていました。少し希望が出てきました。せんじ薬を準備し、もう一度鳥にそ嚢をマッサージして鳥を箱に入れて病院へ連れて行きました。病院は混んでいました: 我々が先に助けをいただいたテーブルには牧羊犬が点滴機の下に横たわっていました。医者はこの時は何かぞっとする平べったい鼻づらの品種で悲しげな視線の猫に注射をしていました。牧羊犬はまだ点滴機



...そしてその哀れな結果

¹<http://old.zapbureya.ru/biserov/litrpage1.htm#chernish>

の下に十分長く横たわせられたままで、ビクトル・シャリコビッチは我々を執務室に導き、そこでは食事用らしいテーブルが空いていて、ハチクマの面倒を見始めました。この時はそ嚢にせんじ薬を流し込むことにしました。その後少し待って少量の脂肪を与えました。これらの一連の手順に耐えた後、我々は半時間後病院を後にしました。家に戻りながら私は鳥にそ嚢をマッサージし続けていました。

夕方までにそ嚢は小さくなりませんでした。すっかり柔らかくなり、首で独特の動作をすることがなくなりました。そして鳥に食欲さえも現われました。後で私は鳥に小さな肉片を与えてみることにしました。夜には朝までにはなんとかなる希望が見えてきました。

8月26日



調子はどう？ まずまず、よくなったみたい

うわあ！全てが正常化しました。そ嚢からは食べ物はいしかるべき所に出て行きました。食欲が戻りました。今回は苦い経験から学び、私は食べ物の量をずっと減らし、混合物の中の米の粥に代えてオートミールを加えました。これらは全て数秒でなくなりました。

ハチクマの食事マナーには驚かされました。嘴でまるで宝石工のように仕事をし、皿の中には餌の小片も残っていませんでした。たまたま食事の過程で何か転げ出すことはあるにせよ、皿の中もそのまわりも全てが拾い集められていました。私に浮かんだのは、このような繊細な仕事はこの種の特別な餌に関係しているのではないかとのことでした。ハチクマはヨーロッパハチクマもハチクマもハチ目の幼虫(スズメバチ、マルハナバチ、ミツバチその他)を餌にして、他の猛禽類に

比べて細くて長い嘴でハチの巣からそれらをほじくり出すのです。ハチクマの鉤爪も同様にそれほど鉤形をしておらず、獲物を押さえつけたり引き裂いたりするにはむしろ適しておらず、自分の獲物の巣を掘り出したり壊したりする方に向いています。おそらくはこのような血生臭くない性質が私たちの養い子の平和好きな性格をも説明するのでしょうか。インターネットで私はこの種の性格と知的な能力についての面白い論評を見つけました。たとえばハチクマは非常に接触を楽しみ、自身の生活様式と、世界で最も知的だと認められているカラス類に近い飲み込みの良さで、簡単に調教できると書いてあります。ハチクマに餌をやって仕事に行き、彼に餌を与えるために食事の支度をしに帰りました。

帰ってみると鳥は生きていて健康そうと分かりました。床の多数の点々が食物が消化されたことを示していました。しかしこの点々の数とそのあまりに水っぽい粘調度からハチクマの胃が正常に働いているか疑問に思えてきました。養い子に餌をやって部屋を片付けて、どのような便を正常とみなすべきか、またどのようなものが消化不良を示すのかについての情報がみつからないかと願い、またインターネットに入りました。私がみつけた情報は少し私を安心させてくれました。非常に水っぽい特殊な便は猛禽類には普通でした。また食べた餌による多数のさまざまな種類の猛禽類の糞の写真のあるウェブページも見つけました。まったくインターネットは人類の最も偉大な成果の一つです。

8月27-28日 (休日)

鳥は終日監督下にいました。ハチクマは気分がよいようでした。誰も彼に名前を付けるべきか考えていました。鳥の性別はこの成長段階では判定できず、少し後になって虹彩が変化した時に明らかになりました：雌では黄色になり、雄では赤くなるのです。今ではまだ目は暗褐色です。オシカと名前を付けようと思いましたがマラートはこのような厳粛な鳥には似合わない

と言いました。ちょうど都合よくインターネットでハチクマを飼育している人の話を読んでいて、オシカという名前は最もよく広まった呼び名だと知りました。いろいろな名前を試しましたがどれ一つ馴染みませんでした。結局、彼(雄)のシムシム、セメニッチ、シムシミッチ、シマと導いてシムカを選びました。



止まり場の集合体とシムカの好きな移動経路

無限のインターネットで、屋内での行動では全ての猛禽の中でハチクマが最も興味深いと読んで知りました。そして実際、ひとたび私たちが彼の部屋に入ると、鳥は活発になってさまざまな声を出し始めるのです。シムカの目には恐れはないようで、きっと好奇心といわずに心が読み取れます。少し元気になってシムカは部屋中を動き回り、止まり場の数を増やすために私たちはバルコニーから、そこに転がっていたまったく古くなったテレビの滑らかな骨組みを持ち込み、それに釘で長い枝を取り付け、さらに一つのステッキをいすの脚に結びつけました。このようにして高さ互いの距離がさまざまに配置された一体となった止まり場の集まりを作りだしました。この新しい構造物を部屋に持ち込むやいなや、シムカはソファからこれに忍び寄り、

横木にびよんと飛び乗りました。私たちの前で彼はまったく恐怖を感じさせません。彼は彼の部屋に現われた新しいもの全てに興味深く調べます。洋服だんすを閉めるのを忘れると、すぐにシムカは近くに飛んできて中に何かあるのかを長く調べていました。

8月30日

猛禽類を正しく管理するための情報を探してインターネットを研究することが長く続きました。止まり場には柔らかい布地を縫い付ける必要があることがわかりました。さもないと、猛禽類は屋内ではあまり動かない生活様式をとるので、一ヶ所に長くとまり、摩擦して足が炎症を起こし、もし助けがなければ死んでしまうのです。マラートのチェック柄の古いシャツを使い出しました。私は長いこと雑巾にしようと思っていたのですが、夫は調査に行く時はよく使いシャツの布地が暖かくて柔らかく着ていると快適であると異議を唱えました。しかし私たちは古いもののうちにより適切なものを何も見つけられなかったので、マラートはシャツを処分することに同意してくれました。私はシャツを太い帯に切断し、それをシムカがよく休息時に落ち着いている場所に巻きつけました。

2日めは、朝までに少し多めの餌を与えてシムカを昼中独りにさせておきました(この成長段階では1日2回の給餌で完全に十分であるとインターネットで読んで知りました)。仕事から帰ってくるとシムカは正常な状態であるが空腹であることがわかりました。床にはいつも水が溢れていました。これはおそらく彼が水の中でなんらかの食べ物がないか探そうとしているのだとの考えが浮かびました。というのはハチ目の幼虫がない場合はカエルがハチクマの主な餌だからです。家の近くでカエルを見つける試みは成功しませんでした。洗面器に小魚(グッピー)を放してハチクマの反応をみようというアイデアが浮かびました。小魚は自然保護区の所長で幼年時代から魚を飼うのに夢中だったアリバート・ドゥミコビッチが提供してくれました。少量の水の入った洗面器に放してやるとシムカの興味をひきました。彼は長く止まり場から見つめていましたが、捕まえようとはしませんでした。しかし、水から引き出されてびくびくしている魚をシムカの前に示すとすぐに飲み込まれてしまいました。シムカの食欲はゆっくりと弱くなり始め、皿の餌に頭から突っ込んでいくことはなくなり、代わりに最初は止まり場から注意深く皿を眺め、その後ゆっくりと飛び降りて皿の中身をゆっくりついばみます。定期的に竜骨に触れるとシムカが急速に体重を増していることがわかります。もし成鳥のハチクマであったならば深く考えることもなく、数日のうちには越冬への旅立ちに成功させるべく自由

の身に放していただいでしょう(今はちょうどこの種の秋の渡去の時期です)。しかしこのような若鳥では私は決心できません。私たちの計画は、もし鳥が全て満足な状態であれば来年の夏に自然保護区内で放そうというものです。それまでにシムカに呼び声の音で飛んでくるように教えるように努めます。自由に慣れておらず狩りの技能が回復するまでの間、最初のうちは餌を与えるためです。

9月3日



何かありますか？



仕事から帰り、カーテンレールから部分的にもぎ取られたブラインドを見つけました。鉤爪と頭で付けた小さな裂け目から誰がやったかは明らかです。シムカに窓への突進を余儀なくさせたものは自由になりたい願望か、はっきりではないものの窓の向こうのバルコニーの手すりを行き来する鳩たちでしょうか。私の前では彼はそのような試みは行いません。いずれにせよポリエチレンを帯に裂いてブラインドをバルコニーの洗濯物ロープに吊るしました。帯が風ではためき、鳩をおどして追い払い、シムカがいらいらしないよう期待しました。

夕方、シムカは空腹でしたが、肉はまだ解凍できておらず、しばらく待つ必要がありました。そして私はその間一杯のコーヒーを準備して、家へ帰る道で買った白パンをつかみ、シムカの部屋にあるひじかけいすに腰をおろして食事を始めました。シムカは興奮して、私の方に忍び寄り、最後にはひじかけいすに飛んできてひじかけにとまりました。そして白パンを持った私の手の方に近づいてきました。私は驚きました。鳥が若いことと、擦れていない羽が状態の良さから判断して、この若鳥が私たちのところに来るまでに他人の手に乗っていなかったことを確信できていなければ、この鳥はすでに以前飼育されていてこのように餌をもらっていたのではないかと思えるほどでした。というのは始めて人の手に落ちた鳥にとって、人を見て、人が何を食べて、人の手にあるものは食べ物であることを理解することは十分に難しいと思えるからです。私は白

パンを持った手をそらさず、シムカは嘴で白パンにしがみついてきます。層をなした練り粉は十分に堅く、簡単にかみ切ることはできません。シムカと私の間で引っ張り合いの遊びがしばらく続きました。私が白パンをこちらに引っ張り、シムカが自分の方に引っ張りました。そして最後には彼は一片を引きちぎることに成功しました。しかし嘴にくわえた後、吐き出してしまいました。哀れな鳥は努力したものの無駄に終わったのです。この光景はこっけいなものでした。残念ながらそばに写真機を持ったマラートがいませんでした。彼は2週間遠征中です。

9月4-5日 (休日)

シムカはもうすっかり飛べます。彼がある止まり場から別の止まり場へと飛び越える前に長く力をためて狙いをつけていた日々を忘れてしまうぐらいです。今では彼の部屋からしょつちゅう翼を打つ音が聞こえてきます。これは彼がすでに飛べるか、あるいは飛ぶための充電中であることを意味します - これもまたこっけいな光景です。大きな翼を広げ、活発に羽ばたき始め



日光浴の最中



体操

ます。強い上昇力が発生するので、もしシムカがこの時にテーブルにとまっていればテーブルの上板から彼をしばらくの間浮き上がらせるぐらいです。そして一面では鳥が一ヶ所で単に跳ねているようにも見えます。そして私の言葉を確認して、シムカは私が彼の飛行の進歩を書き留めている部屋に飛んできました。彼に出て行くように頼みました。というのはこの部屋には、けばなしじゅうたんが敷いてあって、鳥がいるにはふさわしくないからです：ここはあなたの場所ではありません。マラートはこの鳥に大変な同情を示し、けばなしじゅうたんを取り除いてシムカの生活空間を広げるようすでに提案していました。そういえばシムカが私よりもマラートに大変な好意を示しているように私にも思えました。彼がシムカに語りかけると、シムカはより大きな声でぶつぶつ言い、彼が近づくとも一層活気を見せるのです。このことから私はシムカはおそらく雌なのではとの考えが浮かびました。異なる種の間においても異性への誘因力があるとの考えもあるためです。これまでそのような動物を一度ならず観察していました。私の犬の全てが(私はいつも雌犬のみを飼っていました)、全ての世話は私がやっているにもかかわらず、私の家族のうちで夫に好意を寄せていました。私が幼なかつたころ住んでいた雄猫は去勢されていましたが、私やママにより愛着を示していました。私たちの家で数年間住んでいた雄のシノリガモはマラートを全く無視してしまして、雛の段階では娘を母とみなしていました。性的成熟期に達すると私に求愛さえ試みしました。今回もこの仮説を裏付けることになるか分かるでしょう。

土曜日にはシムカに日光浴を実現させてやることにしました。というのも部屋は大きいのですが一日中日が当たらないのです。とりわけ若い鳥にとって日光は重要です。片方の開き窓を開けて網を張った窓枠の近くに彼を移動させました。シムカは明らかに興奮して、注意深く見つめては身震いをし、通りからも聞こえるほどの鋭い声をその都度出しました。5分後には慣れて、閉じてある方の開き窓のガラスを通して外へ突破しようとし始めました。私は彼を部屋に戻さざるを得ませんでした。日曜日は、前もって閉じてある方の開き窓のガラスに本を立てかけてシムカが通りを見られないようにして再度試みしました。今回はシムカはおとなしく窓枠で15分ほど過ごし、しばらくの間時間翼を半開きに保ちさえしました。部屋に連れ帰ったのは鳥が暖まって嘴を開き始め、暑い時にちょうど犬がやるように喘ぎ始めた後のことでした。

シムカの餌の問題は彼がうちの家に来て以来私をわずらわせています。私がインターネットから得た全ての文献や情報では、猛禽類は餌に必ず生きた、あるいは殺したばかりの獲物(小さな鳥、ネズミなど)を加える必要があるとなっています。この理由で私は家に自発的に猛禽類を連れてきませんでした、というのも私はこのような食餌はいやなのです。私のところへやってきた全ての猛禽類は、大きな街に住んでいる人の手にすばやく手渡すよう努力しました。街ではこのような



ぶどうを試すシムカ

世話はそれほど困難ではないのです。さらにチェグドムイン保護区では観賞用の鳥の愛好者は多くなく、私の知る限り猛禽類については全くおりません。当面はシムカには餌として鶏の肉、肝臓、胃、心臓を与え、オートミールのかゆ、ゆで卵、少量のおろしにんじんをスプーンで添えています。これら全てによく挽いたコーヒー、卵の殻とはちみつで味付けをします。少し前から餌に茶さじ一杯の甘いイースターチーズを加えています。シムカはこれを何を差し置いても大喜びで食べるのです。シムカの食事にコケモモの入ったチーズケーキが何度か入るようになった後、シムカの便は濃くなりずっと稀になりました。おそらくコケモモに固着させる作用があるのでしょう。私はこれを嬉しく思いました、というのもここまで5分の間に何度も排出することができたのですが、これは猛禽類にしてはちょっと多すぎる感じがしていたからです。今はここまで挙げたメニューをシムカは気に入っているようですが、さらに先に行くとききた餌を入手して与える私にとっては気が進まないテーマは頭に浮かばないのです。ハチクマはそれでも大部分が昆虫食の鳥なので、与えているメニューが彼に合っていると望みたいです。魚食-昆虫食のシノリガモが、3年間も機嫌よく私のもとの暮らしていたのですから。

インターネットでハチクマはあらゆる野菜やフルーツ、とりわけぶどうが好きだと読んで知りました。すいかは拒みましたが、ぶどうは興味深そうでした。私は小さい固まりを与えたところ、シムカは嘴でそれを取ったものの落としてしまいました。しかし私がぶどうをまるごと与えると、それを足にもぎとり、ついばみ始めました。シムカの足からぶどうがすべり落ちた後、私はそれをそれまで置いてあったテーブルの上に置きました。

9月6日

鳥の「屋根が飛び」ました。何が原因なのかわかりません。日光浴が起動装置の役割があったのかも知れませんが、単に時期が来たのかも知れませんが、シムカは南に行きたがり始めました。日曜日の夕方にはずっと部屋の中を飛びまわり、カーテンに宙吊りになりました(チュールの布を外してずっと密な布に替える必要がありました)、暗くなり始めてようやく落ち着きました。朝にはまた全てが再開しました。しかし、私が本気で心配になったのは鳥の食欲が非常に衰えたことです: 昨日の夕方には夕食の半分しか食べませんでしたし、今朝も同じでした。彼が完全に食べ物を拒絶するのではと恐れています。このような強い渡りの不穏にはカモですでに経験しています。命をかけた本能との戦いなのです。もしシムカが完全に食べ物を拒絶すれば、彼を街から連れ出して放してやろう、あるいは2週間の脂肪の蓄えが彼が渡去して生き延びることを可能にするかもしれない、チャンスはもうあまりないことは分かっていますが、部屋でのたうちまわり、飢えるさせてはおけないと考えてしまいます。悲しいことに、私にできることは仕事に行き、座ってずっと彼のことを心配しつづけるだけなのです。

インターネットで得たハチクマについての興味深い情報

なぞなぞ: 鋭敏な感覚の持ち主の鳥は? (考えられる答え: ハチクマ、チュウヒワシ)

名前と完全に一致して、空腹のチュウヒワシは蛇を探して出かけますが^a、ハチクマについては壊れたハチの巣で食事を終えるというだけではありません。ハチクマは待ち伏せから注意深く飛んでいるハチの後を追ひ、食べ物を積んで巣に急いでいるハチの飛行と、獲物を求めて飛び立ったばかりの空腹のハチの飛行を音で正確に聞き分けます。巣にたどりついて、ハチクマは巣を枝で掘り崩すか、もし巣がネズミの穴にある場合、熱心に地面を掘り始めます。強力な鉤爪の足で発掘を終えると、ハチクマはハチの巣から正確に幼虫を選び取り、狂乱したハチがぶんぶん飛び回るのにほとんどまったく気にすることもなく平然と幼虫に舌つつみを打ち始めます。

ハチの巣をつきとめることには忍耐が必要で、この点でハチクマに匹敵する鳥はありません。ときどき彼らは何十分にもわたってじっとして、そのうえ頻繁に変なポーズ、例

えば頭をわきに傾けて首を伸ばし翼を持ち上げたポーズ、をとります。産卵にはハチクマは他の大半の猛禽類より1か月遅く5月終わりから6月始めにようやくとりかかり、子供を育てる時期をハチの群れが十分多数に増殖した状態が整う時期に合わせています。ハチの餌が十分でない年には主にカエルやトカゲで我慢します。

^aチュウヒワシのロシア語名は「蛇を食べる者」、ハチクマは「ハチを食べる者」

9月10日



Высоко лежу,
на всех сверху
гляжу

高くとまって上を眺める

何日前か、シムカはペリットを吐き出し、それをほじっていました。ハチクマに消化できない残りには、にんじん、シムカが羽の手入れをする時に飲み込んだ綿毛、鶏の胃の堅い内張りが含まれていることがわかりました。

昨日はキリギリスを捕まえ、シムカに与えてみました。彼はすぐにキリギリスをひったくり、一瞬くわえていましたが吐き出してしまいました。もう一度与えてみると彼は準備してひったくりましたが、その後また落としてしまいました。そして10回も繰り返しが続きましたが、シムカは飽きることなくキリギリスをひったくりました。しかし私は最後にはキリギリスを捕まえるの飽きてしまい、この遊びはおしまいになりました。

9月13日

休日は過ぎ去りました。シムカはいつも通り当惑させてくれます。日曜日には彼は私の部屋に飛び込んできてブラインドにすがりつきました。お日様が差していたので彼に少し日光浴させてやることにしました。開けてある(網は張ってあります)前の窓枠に置いてやりました。普段通りシムカは5分間はおとなしくとまっていたのですが、外に突進を始め、あるいは逆に窓枠から離れて部屋の中に狙いをつけました。しかし今回はしばらくとまって、横になってほとんど2時間動かないポーズで



昏迷状態のシムカ

太陽に当たって横たわっていたのです。その間私は彼を手取ることも彼の部屋に移動させることもできませんでした。何が起きたのでしょうか？私には分かりませんでした。シムカは動かずに横たわり(糞すらしませんでした) 頭だけいろいろな方向に回していました。彼には通りの騒音は全く注意を引かなかったようです：隣の家では屋根の修理をしていまして騒音がしていましたし、その後窓の下で雄猫たちが競技会を催していました。この時間に私は彼をなでて羽毛を触ってゆくことができました(シムカにはハジラミがたくさんいることに気づき、一つ取りさえしました)。普段は彼は触られることを嫌がるのですが、暑くなり、私は噴霧器から水を定期的にかけてやりましたが、シムカはまたそれにも反発しませんでした。彼を部屋に連れて行った後、彼は餌を拒否しました(やっとのことでちょっと食べるよう説得しました)、そして大変不穏になり、ずっと止まり場から止まり場へと飛び回り、ブラインドにすがりつきました。私はこれは渡り行動の何かの要素なのではと思います。このような光線療法後は必ず活動性が高まり、食欲が落ちることに気づきました。

すでに3日間綿毛の脱毛が激しくなってきたことに気づきます。鳥は頻繁に羽を引っ張っています。至急に鳥の寄生虫の薬を探さねばなりません。

シムカからの願望により、たんすのてっぺんの高さに止まり場を作ってやりました。そしてここがすぐに彼が滞在するのに一番好きな場所になりました。そのような高さから落ちてくる糞爆弾が広い範囲にしぶきを飛び散らせるので、洗面器を調達せざるを得ませんでした。部屋はどんどん居室とは思えないものになってきています。チュールの布に続いて、ここでもカーテンレールを取り外さざるを得ませんでした。シムカがそこにとまっている時、カーテンレールと天井の間に自分の体を押し込んで白塗りを汚してしまうからです。ブラインドは暖房のパイプにくくりつけました。



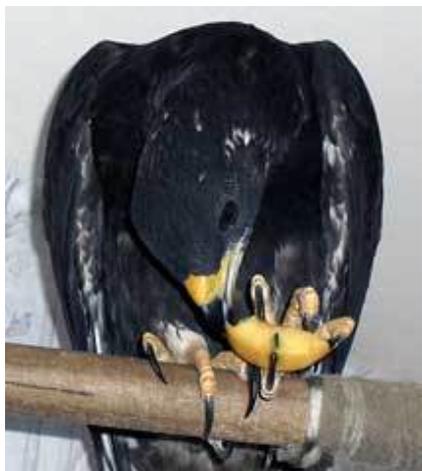
掘って、掘って...掘って、掘って で、ハチはどこ？

バルコニーから不用品を撤去し、鳩をおどして追い払うポリエチレンのブラインドを準備しました。それをもみくちやにして、サイドボードの上に置き、ちょっと後で別の場所に持っていこうと計画しています。しばらくしてから私の注意はシムカの部屋から聞こえてくるかさこぞする音に引かれました。行ってみるとそこでシムカは一生懸命ブラインドの山を掘り出しています。彼はこれがハチの巣だろうと想像して一心不乱に5分間働きました。

9月20日

私たちがうちの養い子に新しいことを見出してからさらに1週間が過ぎました。というのは、ついうちのハチクマがいったいどんなフルーツを好きなのかを明らかにすることに成功したのです。これまでは私は、猛禽類の飼育について詳しく知らせる多数のインターネットフォーラムで、ハチクマは我が国の猛禽類で唯一、飼育下で好んでフルーツや野菜を食べる(乱用してはいけません)ことを読みました。それで私はシムカは例外なのだろうと思い始めていました。というのは、りんご、西洋なし、バナナ、トマト、スイカをシムカは断固拒絶したからです。ぶどうも不承不承ついばみますが捨ててしまいました。しかしここ数日彼に桃を提示してからシムカの気に入りであることがわかりました。彼は最初提示された一切れをついばみ、そ

の後足にとって最後の一片まで全部食べてしまいました。そう、そうなんです。私たちのシムカは舌が肥えているのです。



桃食いのハチ食い

シムカは満足げに水浴びをします。ちょっと前までは私は彼が完全に入れるように大きなたらいを水浴び用に置いたのですが、何らかの理由で彼は避けました。2,3日前水浴び用として猫のトイレ用のトレイを与えてみました(大きくない猛禽類の水浴びにはちょうどよいサイズだとインターネットで読んで知りました)。シムカはあっという間に床に飛び降り、このミニチュアプールに入り込みました。

マラートは9月15日にモスクワの昆虫学者アレクサンドル・リフキニと遠征から戻りました。マラートに対するシムカの反応は平静なものでした - 普通通りの穏やかな「キヤ-キヤ-キヤ...」という声で歓迎しました。しかしサーシャ(アレクサンドル)が部屋に入るとすぐに断続的に甲高く「言葉」を響かせました。このように、私たちのシムカは知人と他人を区別することは明らかになりました。

私たちはハジラミからは免れられたようです。犬猫のノミ用のパウダーでシムカを処置しました(チェグドムインの動物店ではこれよりふさわしいものは見つけれず、インターネットフォーラムの一つでみつけたこの方面に造詣の深い人たちが、このパウダーは鳥にも役立つと耳打ちしてくれたのです)。この処置はシムカがまた開けた窓の前で虚脱状態に陥っている時に行いました。文字通り10分すると鳥のまわりに何十以上の死んだ虫が転げ落ちました。

9月27日

シムカが私たちと一緒に暮らすようになってすでに1か月以上になります。この期間彼は目に見えて太り、私たちも彼に減量をさせ始めることを考えました(そうすることが必要だと読んで知りました)。しかしまだそんなことはできません - 鳥がかわいそうです。シムカを一日1回の食事に移す時期です。まもなく私たちのハチクマを養う餌の成分の問題を解決できそうです - クロテン猟師たちと、彼らの罠にたまたまひっかかった鳥の全てを私たちのところに運んでもらえるよう交渉をしました。当面はシムカは鶏肉と凝乳、卵、かゆ、にんじんとはちみつ混合物で養います。砕いた卵の殻とビタミンを添加します。休日には桃がもらえます。この間養い子が健康を害している様子はまったく感じませんでした。



清潔 - 健康の秘訣



こうやって食べる怠け者ハチクマ

仕事の日にはシムカは一日中一人で家にいます。彼が経験を得られるように窓の柵を被っているブラインドを一部外しておきました。今では彼は立ち止まって何時間も通りで起きていることを観察しています。窓の向こうにはスタジアムがあり、よくサッカーの試合が行われていますので、私たちのシムカはきっとすぐにサッカーファンになるでしょう。餌を与えるまでのほぼ1時間窓にカーテンを下ろします。もしこれをしなければシムカは食べないのです。通りはこれまで通り彼に何らかの麻痺させ興奮させる

作用があるようです(窓が開けてあると鳥は身動きできなくなり、閉めると鳥は部屋に飛んできて20-30分で落ち着きます)。

面白い観察をしました: シムカに桃を与える時、最初は嘴で受け取りますが、後では左足で受け取り、足で持ちます。小さい固まりを少しずつ噛みとって飲み込み、任意の別の餌の大きな固まりに同様にとりかかります。この時に彼が右足を使うのを見たことがありません - 私たちのシムカは興味深いことに左利きとわかりました。ほかのハチクマでもそうなのでしょうか? インターネットフォーラムでこの質問を聞いてみなくてははいけません。

10月4日

夏に近かったころ、シムカの訓練に従事している間、彼は私たちに関して特に目立ったことはしませんでした。以前には準備した食事の入った皿をサイドボードの上に置いて、ちょうどその間に仕事に向かう支度をして、10分後シムカの方に向かうと、皿は空になっていました。しかし今回はシムカの部屋に出向くと餌は手つかずのままでした。残った餌が発酵してしまうか、あるいは夕方まで鳥を飢えさせて仕事に出かけることはしたくありませんでした。それで私は天井の下の止まり場にとまっているハチクマに餌を与えるため腰かけいすを下に置いて上に登りました。シムカはすぐに差し出した餌を食べました。そしてこの時から餌を上へ届けてもらった時だけ、餌を受け取ることを受け入れるようになりました。一度私は仕事に遅れそうになり、夫にハチクマに餌をやるよう頼みました。マラートは腰かけいすの助けに頼ることなく、皿を手でそのまま持ち上げましたが、彼の高さは十分でなく、シムカが鎮座している止まり場よりもずっと低い皿は拒否されました。私たちのハチクマは出口を見つけ、横木に横たわって、おそらくバランスをとるために翼を広げました。このような姿勢は食べるのに具合よくありません。私たちの怠け者のこっけいなポーズを写真に撮るため、マラートは私を呼びました。シムカは彼に差し出されたもの全てに非常に好奇心旺盛で味わってみます。マラートはなんとか自分の眼鏡を差し伸べましたが、これも彼は嘴で触って調べました。

フォーラムではハチクマを飼育している、あるいは過去に飼育していた人たちと馴染みになることが続いています。誰もが異口同音にハチクマの変った行動や信じ込みのしやすさ、猛禽類にしては変な食物の好みについて語ります。実はほとんど全ての人がヨーロッパハチクマを飼育しています。この種はロシアのヨーロッパ地域に住んでいます。どうやら私は少数の幸運なハチクマの所有者のようです。シムカはハチクマ(「冠羽のある」ハチクマ)ですが、冠羽は小さく興奮した時しか見られません。その時は普段は密で体にぴったりつけている羽毛が逆立ち、冠羽がよりはっきりします。2種は違う種であるにもかかわらず行動は大変似ています。

フォーラムでハチクマの左利きについての質問をしたところ、全てが左利きではなく習慣による、あるいはそれぞれの鳥によるとの回答を得ました。ヨーロッパハチクマの所有者の一人は私にはこっけいに思えた写真を取り出してきました。そして私は自分の「鳥類学ノート」に載せることにしました。その写真にはドルセトと名前の付けられた完全に健康な鳥が写っていて、このように床にお尻をつけて座って食事をするのが極めて気に入っているのです。



こっち向いてるのは何? 確かめなくっちゃ



床にお尻で座って食べるのが大好きなヨーロッパハチクマのドルセト

シムカはこの時期には彼の気に入らないフルーツのリストが増えました。今回はキウイを拒否しましたが、その後に出した桃はすごい食欲で食べました。選り好みについてはシムカは徹底しているようです。

10月15日



暑いよう

シムカが私たちのアパートに住むようになってからもう2か月になります。その期間彼は丈夫になり丸々になりました。何週間か前、私たちのハチクマが、そして私たちも少なからず肝を冷やす事件が起きました。私はシムカの部屋から出口を隠しているブラインドを引くのを忘れましたが、鳥はこれを活用するのを忘れませんでした。逃げて自由になり、私の部屋に舞い込み、ブラインドに吊り下がりました。私が捕まえようとするのを見て、シムカはそっとブラインドを離れ廊下の方に飛びたちました。そしてそこから自分の部屋の方へではなく、キッチンに向かったのです。ガラスの割れる音が響きました。私は彼がテーブルに着地して食器を割ったと考えましたが、実際ははるかに恐ろしいものとわかりました。キッチンにかけつくと、シムカは割れた窓のかけらの上に窓枠に見つかったのです。キッチンにはブラインドがなかったもので、シムカは全力で窓に突入し、ガラス枠の一つを割ったのです。気の小さい人には見られない光景でした：窓枠に残っていた2つのガラスの間で鳥の首が締め付けられており、両足でガラスの破片に乗っていたのです。私は鳥の頭を自由にしてやり、哀れな鳥の指をゆっくりと伸ばし、足をガラスから注意深く抜き出したのです。かれこれの後、怯えてかき乱れた鳥は自分の部屋に戻されました。不思議

なことに、鳥にはほとんど目立った傷はなく、少数の羽を失っただけで済みました。ガラスの厚みが普通より2-2.5倍厚かったので、おそらくガラスの破片が鋭利になりすぎず、シムカは助けられたのだと思いました。衝撃がこれほどの厚さのガラスを割るほどに非常に強かったので、鳥に脳震とうの症状が症状が現れないかずっと待ちましたが、すでに7日が過ぎましたが鳥は気分が上々のようです。そのうえ渡りの不穏がついに止み、鳥にはまた猛烈な食欲が現われ、私たちは、天井の下にいる彼の方に登って、食べるよう説得する必要はなくなりました。今では彼の部屋に私が餌を持って現れると、私の高さよりちょっと低い高さにある止まり場に降りてきて、私が彼のところへ食物を運ぶのを待っています。彼は従来通り手から食べるのを好み、私も反対ではないので、彼がそうしている様子を近くで観察するのが気に入っています。

家には暖房があつて、今では時おり十分暑くなることはありますが、天井の下にいるシムカには一層そうだろうと思います。いまでは部屋を思う存分飛んで、涼むために変わったポーズをとります：いつものようには翼を背中に置かず、力なく胴に沿って垂らし、しばらくの間そのようにとまっています。

まもなくシムカには厳しい試練が待ち構えています。2,3日後、私はほとんど2か月の間休暇に出かけて、シムカの全ての世話はマラートにかかることになるのです。彼はもちろん努力するでしょうが、おそらく私ほどの注意を鳥に向けられないでしょう。今は私はシムカの飼育と餌の詳しい手順を書き付けにかかりきりです。

「鳥類学ノート」での次の報告は休暇の後に記します。全てが無事であるよう、そして、帰ったら今と同じように健康で快活なシムカに出会えることを願います。

12月20日



おい、くすぐったい

を与えられないとわかると手を触れないのですが、マラートは遠慮することなく自分の欲求を重要視します。猫や犬ではこれはすぐに結果が出て、数日間のこのような密接な交流の後は動物たちはマラートからあとずさりします。私がいないうちにマラートがシムカにもそうしたのかまだ知りませんが、今はシムカはマラートに多くを許しています – 腋の下をかいたり、背中を叩いたりなどなど。9月終わりに店から桃がなくなったのですが、マラートはシムカが気に入ったもう一つのフルーツを見つけました – 柿でした。そのうえ柿は非常に柔らかくなくてはいけませんし、足がそのようなものを掴めないため、シムカは果肉を皿からついでむ必要があります。そして休暇先から飼育されたミールワームを持ち帰ったのですが、最初はシムカがこれを食べたく思うか？よくわかりませんでした。ミールワームはシムカの興味を引き、彼は嘴で捕まえ始め、しばらくくわえたあと吐き出しました。はちみつを軽く塗る必要がありました。その後は「はちみつソースのミールワーム」の皿は食べられました。ミールワームの繁殖サイクルには数ヶ月かかります(周囲の環境の温度によります)ので、春にはシムカの食事に新しい成分を補えそうです。

2011年1月11日

全ロシアの新年の祝日は終わりましたが、その間にシムカはまた新しい面を明らかにしました。猛禽類はカラス類と同じように大変知的ですが、高い知能を持つ生き物として独特の遊びの能力があります。そのようなものの一つを私たちのハチクマも見出しました。天井の下にたんすに固定してある小さな棚の下に紙の固まりが転がっているのに12月の終わりにはすでに気づきました。これはシムカがたんすに置いてあった箱を砕いたものですが、目撃者はありませんでした。しかし1月2日にボール紙の箱を嘴でこする音を聞いてシムカの部屋に近づき、彼の行動をしばらく観察しました: シムカはダンボールの箱の固まりをもぎ取り、たんすの端まで行ってそれを下に投げたのです。なめらかに床に落ちるのを注意深く観察し、その後また箱に戻って全てが新たに繰り返されたのです。私は棚に丸めた紙を置きましたが、それはすぐにハチクマの興味を引き、彼は作業をそちらの方に切り替えました。紙を破くのはずっと簡単になり、シムカは熱心に取り組みました。半時間ほど私たちのハチクマが、飛ばした紙飛行機を楽しんでいるのを観察しました。

昼は14時から16時が日光浴が再び始まります。そのために私はシムカを昼間でも窓の氷が解けない彼の部屋から、窓が南西に向いている部屋に移動します。彼は手で捕まえられるのが

好きではないので、彼に自分から手にやってくるよう教えることにしました。1回目はなんとかできました：鳥の足の下に片手を入れ、手に来るように促すようもう片手でちょっと押してやりました。これをするとシムカはすぐに手に飛び降りようとしてきました。私が根気強くやったので最後には成功しました。シムカは窓から通りで起きていることを全て注意深く観察しながら、2時間を日光に満たされた窓枠で満足して過ごしました。シムカを窓に移す時、彼に条件反射が生じるよう努めて、私はいつも繰り返しています「お日さまのもとに行きましょう。お日さまのもとに行きましょう...」。そしてだんだんうまく行っているように思えます。日に日に部屋から別の部屋へ鳥を移動することがどんどん簡単になって行きました。窓枠での鳥の行動は秋の渡りの時の行動とは本質的に異なっていました。当時は鳥は昏迷状態に陥り、周囲で起きていることに反応しませんでした。今はシムカは興味を持って長く窓をみつめ、彼の視界に入ってくる人々、車やペットを視線で追います。窓の反対側の軒には何度か鳩がとまっていて、すでに求愛の時期が始まっていて、雄はくうくう鳴いて雌を追いかけます。鳩に対するシムカの反応はおとなしいもので、彼は鳩を観察するものの襲いかかろうとは試みません。



新年おめでとう！

シムカはミールワームの味見をして、今では私がミールワームを、床かカバーをかけたポリエチレンの長椅子に投げるとそれを満足げに狩ります。彼がすっかり食べてしまった後、もうちょっと投げてもよいよ、と分からせるために足で掘る行動を示します。栄養物の混合物の入った箱に甲虫が現れ、その数が50に達した後で、ミールワームを与えようと考えます。蛹になるのに成功せずに残ったミールワームをシムカに与え始めてもよいと判断しました。1匹の甲虫は何百以上の卵を産むため、従って何か月か後には新しい世代のミールワームが生まれ、その量はシムカに夏まで十分足りるでしょう。

猟師たちからはクロテンの罠にかかって死んだ鳥が届き始めました。主なものはアカオカケスで、とても好奇心の強い生き物で、心を痛めます。鳥は1週間に1羽与えます。内臓を抜いた野鳥をシムカは拒否しました。肉を小片に切り裂いて彼のために与える必要があります。シムカは野性の肉をいやいや食べます - たっぷりはちみつをかけてやる必要があります。

4月11日

気がつかないうちにさらに3か月が飛ぶように去りました。シムカは大変機嫌がよいようですが、私たちはハチクマにあまりに慣れてしまったため、彼を何か奇妙とは感じなくなるほどでした。彼は私たちのもとかついていた大多数の動物と同じく、徐々に家族の一員に変わって行きました。冬の間は一日はふつう光をシムカの部屋に入れることから始まりました。彼が目を覚まし、私たちが仕事に出るまでに食べてしまうことに同意するためにです。光を入れてから餌を与えるまで半時間以上が経過する必要があります。もしこの条件が満たされなければ、シ



気晴らしをするシムカ



窓の向こうの面白いこと



ミールワームを食べるシムカ

ムカは餌を拒んでしまいました。私たちは仕事に出る時に餌が残らないことを習慣としました。餌が腐ったり鳥に消化不良をもたらしたりしないためです。シムカに餌を与えてから仕事に出かけます。私たちが家へ帰るのは6時ごろで、まず最初にシムカの夕方の方の肉を解凍します。餌を与えた後は部屋の整理をし、ちょっとばかり鳥と対話をして明かりを消します。その時しばらくの間は、廊下の明かりは消さないでおきます。そこからの光がしばらくの間部屋を弱く照らすためです。この時にシムカが不安を示さなければ、15-20分ほど経って廊下の光も消します。明かりを消した後もシムカが静かにならず、部屋を飛ばうとすることがあります。その時にはまた明かりをつけなくてはなりません。そしてシムカを寝かしつけるのがさらに20分ほど先延ばしになります。春の到来以来、明るい昼の長さが増え、ハチクマの目覚めと寝つきはどんどんと自然の光に従うようになり、今では部屋で明かりをつけるのは曇った日だけです。

春の到来以来、シムカの部屋の窓の雪は解け、今は彼はほとんどの時間、通りで起きていることを観察しています。



写真で伸びすぎた鉤爪がよくわかります

店には桃が届けられ、私たちはお祝いにシムカに2,3買いました。しかしそれらは硬くておいしくなかったためシムカが食べるのを拒否することがわかりました。その代わりシムカの気を惹く食べ物のフルーツの2つめを見つけました- マンゴです。そして店にマンゴのある間(1か月間でした)、私はシムカにそれを買ひ、彼は食欲を見せて足で固まりを取り、この海の向こうのフルーツをおいしそうに食べました。

ミールワームも少し成長し、3月の終わりにはシムカは生きた餌を一部分(だいたい30のミールワーム)毎日得られるようになりました。

1月の終わりにはシムカの足に出血した割れ目をみつけました。摩擦による炎症と呼ばれる、猛禽類の足には大変良くない病気の悪化の始まりの記述によく似ていたため大変恐れました。獣医に助けを求めるところ、私たちの医師ビクトル・シャリコビッチ・ドゥミキャンは私たちに足にイヒチオールかシントノマイシンの軟膏を塗るよう助言してくれました。最初は私は後者を用いました。イヒチオール軟膏の刺激臭が鳥を不安にさせると

思ったためです。しかし、1週間シントノマイシンを試して改善しなかったので、イヒチオールを使うことにしました。そして非常に早く治癒しました-1週間で傷は治りました。私がシムカにこの問題を見つけた時、私はどのように彼の足を処置するか不安に思いながら考えました(この時マラートは出張中でした)が、全ては簡単であることがわかりました: シムカが彼の好みの天井の下の止まり場にとまっている時、私が腰かけを急いで下に置き、上に登ってシムカの足を掴みます。この時(ありがたいことに)彼は飛び立とうとしませませんでした。そして簡単に足を引き寄せるとひどくわめきましたが、この時に苦もなく足の裏に軟膏を塗ることに成功しました。この後、鳥はすぐに落ち着きました。摩擦による炎症のさらなる進行を予防するため、より柔らかくなるよう、止まり場にさらに一層を巻きつけました。

しかしすぐに足に新しい問題が生じました- 鉤爪が伸びすぎましたが、また私たちの獣医院が私を救ってくれました。その職員たちは数日中に特別のペンチを用意すると私に固く約束していただけました。この時までにはマラートは休暇から戻っていて、私たちはシムカを捕まえ、彼にタオルを巻きつけ、数分で彼に「ペディキュア」を施しました。

嘴も明らかに通常より伸びていたので短くすることが望ましかったのですが、私たちはこちらは行わないことにしました。鳥が食事をするのを妨げないため、しばらくは全て今のままにしておくことにしました。

シムカの目の色が変わってきました。暗褐色から明るい灰色っぽいこげ茶色にです。おそらく今後の変化は黄色の方向に向かうでしょう。つまり私たちのシムカは以前予測したように、おそらく雌です。そのうえ大変おしゃべりです。私たちのうちいずれかが部屋に入ってシムカに話しかけようとするとう彼女はすぐにおしゃべりに加わるのです(シムカとのおしゃべりの音

声ファイル)。² 彼女の語彙は多くありませんが、シムカはそれらを非常に多様に用い、「単語」にさまざまなイントネーションや回数を盛り込むのです。

6月16日

シムカを自由の身に放すまでにもう何ヶ月も残っていません。下準備は済ませました – 私たちが今年研究を計画している自然保護区の警備所の一つのそばにある州の監察官たちが小さな檻を建てていただいて、シムカは周囲の状況に馴染むまで最初はそこで暮らします。その後、鳥が落ち着けば自由の身になることを許されるのです。

シムカは盛んに換羽をしています。体を縁どる羽、そして翼と尾の大きな羽。放鳥までには羽毛の大部分が新しくなっていることができると期待します。新しい羽は少し違った色をしています。その結果シムカは優美なこげ茶色の羽衣で白い胸当てとズボンの色から、徐々に斑点模様になります：小さな褐色の羽毛は白いまだらがあり、白い羽毛には褐色のまだらがあります。

少し前にテレビでハチクマに関する日本のドキュメンタリー映像を見ました。この種の生態にはまだ分かっていないことがたくさんあることがわかりました。たとえばハチクマの狩りの過程を観察したり撮影したりすることは最近になってようやく成功しました。日本でのハチクマの主な餌は、分布域全域でそうですが、地バチです。そして少し前までは、ハチクマは入り口のすき間から始めて簡単に穴を掘ると考えられてきましたが、最近の研究ではハチの巣のすぐ上の地面を最短距離から掘ることが示されました。

猛禽類愛好家のフォーラムで、ある婦人のもとにおもちゃに夢中になっているハチクマがいてと読んで知りました。そして私たちのハチクマにもいくつかのおもちゃを選べるよう与えてみることにしました。反応は非常に変わったもので、ゴムの竜からはパニックになって逃げましたが、小さな柔らかな犬のおもちゃはすぐにつかみとり、半時間近くそれを細かく分けようとしたのですが、成功しませんでした。

自然保護区の科学部門の職員のフィールドワークの季節が始まりました。彼らの多くは他の街に住んでいて、保護区に基地を設営する前にときおり何日か私たちのところに滞在します。家に新しい人が頻繁に現れるので、シムカは部外者にはるかに寛容になり、彼らに対する反応ははるかに穏やかなものになりました。



マンゴを足で掴むシムカ

²<http://old.zapbureya.ru/biserov/osoed.wav>



竜から逃げ去るシムカ



...しかし小犬には興味深々

7月18日



そしてシムカとの別れが来ました。コルドン、ニマンに7月15日の夕方遅くに到着し、翌日の朝に私たちのハチクマを檻に放ちました。シムカは道中をおとなしく過ごしてくれました。私たちの遠征の宿営地への道筋が予定していた8時間ではなく16時間であったにもかかわらずです。車が壊れて、修理している間はシムカは狭い箱に入っていました。小さな穴からトビゲラの幼虫を与えました。車が小さな川のほとりで壊れたおかげで、この栄養価の高い餌はたっぷりありました。シムカは喜んで手から虫をついばみました。シムカは檻にすぐに慣れ、おとなしくなりました。餌も

拒むことはなく、夕方に近くなってようやく不安気になり始めて檻から出ようと試みました。3日目にシムカに自由を与えることにしました。朝に餌を与えて檻の扉を開けました。シムカは15分ぐらいで勇気を出し、そして、ゆっくりと、檻から羽ばたいて飛び出して、出口の近くに置いてあるひっくりかえった椅子にとまりました(これは以前部屋にあってその後檻に持ってきたものです)。その後ハチクマはカラマツの枝へと飛びたちました。1時間以上私たちの養子は枝から枝へとひらひらと飛びました。この間私たちはたくさんの写真を撮ったりビデオを撮ることができました。最後にシムカは力強く翼を羽ばたいて高く飛びたちました。パブロフスキー小川を飛び越え、鳥は視界から消え去りました。

私はシムカの飛んだ方向へ向かいました。小川を越え、沼地を克服して、小さな鳥の警戒音を聞きました(後でわかったのですがノゴマでした)。私は声の方に向かい、地上あまり高くない折れた枯れ枝にとまっているシムカを見つけました(シムカの最初の自由の飛行距離はだいたい300mでした)。おそらくシムカはノゴマの巣の近くに着地し、その警戒音のおかげで彼女を見つけることができたのでしょう。私はシムカから100mぐらいの小さな丘に座って観察していました。彼女はほとんど動かずとまっていた。10分ぐらいが経過し、カケスたちがシムカに気づいて大騒ぎを始めました。カケスたちは枝づたいに下へ下へと降ってきました。このような攻撃はカラス類によくあり、特に猛禽類をみつけるとそうであることを知っていました。シムカが鳥賊の攻撃に耐えられそうもありませんでしたので、私はシムカを捕まえること

にしました。シムカは手で捉えられることを許しましたが、コルドンに向かう道中ずっと逃げようとしていました。私はシムカを檻の近くに放しましたが、彼女はまた木の方にとまりました。ほとんど2時間彼女はコルドンの近くの木から木へとひらひらと飛び回っていました。そして空に舞い上がり飛び去りました。今度は私たちは彼女を見つけることができませんでした。



2週間ほどの間、私は定期的に外へ出て、呼び笛でこれまで2か月間シムカに教えてきた単純なメロディーを鳴らしました。そうすれば、もし私たちの鳥が大変具合が悪くなれば呼び声の場所を知ってやってきて私たちが餌を与えることができると期待しました。しかし全てが無駄でした。たった一度だけ、放鳥の5日後マラートがシムカが私たちの宿営地の上を遠く舞っているのを見たように思われただけでした(ちょうどこの時彼はコルドンから200m離れた調査ルートにいました)。放鳥の時、シムカは風切羽の換羽中でした。そして私たちのコルドンの上を飛んで行ったハチクマの翼の換羽はシムカのものと大変似ていました。シムカの換羽は遅れていて、野性の鳥はこの時期には換羽はすでに終わっていました。そしてさらにハチクマは保護区では大変まれな鳥です。それゆえ私たちはマラートが私たちの寵児が生きていて健康であることを幸運にも見届けることができたと結論しました。私たちがニマン川上流でシムカを放した時は地バチは少なかったですが、そのかわり巣立ち若鳥(上手に飛べない若鳥)がたくさんいました。そのため、たとえシムカがもしハチの巣を見つけられなくても、巣立ち若鳥を捕まえたり、小さな鳥の巣を壊すことは大した仕事ではなかったでしょう。

驚くべき鳥 – ハチクマのシムカと私たちの交流のお話をこれで終わります。

エレナ・メドページェワ著

注記

この文章は、ロシア、ハバロフスク地方のブレインスキー自然保護区のページ

<http://old.zapbureya.ru/biserov/osoed.htm>

から原著者の許諾を得て翻訳、転載したものです(2010)。現在はこのページ及び文中記載のURLのページは存在しません。



著者のご夫妻